一流指導者におけるキャリア形成過程の仮説モデル構築に関する研究

―スポーツ的社会化要因に着目して―

山田亜沙妃*
工藤康宏**　野川春夫 **　笠原一也 ***

抄録

近年、国際競技力向上施策のひとつとして指導者の養成と確保が重要であると報告されている。若手指導者の養成や日本人の一流指導者のキャリア発展を促すことは、わが国の国際競技力向上にとって重要な課題である。本研究では、海外指導者への依存度が高い日本のスポーツ界の現状を鑑み、日本人の一流指導者に着目し、指導者としてのキャリア形成過程（プロセス）における社会的要因を明らかにし、一流指導者のキャリア形成過程の仮説モデル構築を試みることを目的とした。具体的な目的は、日本人の一流指導者がどのようにスポーツと関わり、一流指導者としての役割を獲得したか、キャリア形成過程のおける要因とスポーツ的社会化要因を明らかにすることであった。研究の手順は、研究の手順はキャリア形成過程の仮説モデル（素案）を作成し、専門家 4 名を対象に行ったフォーカスグループインタビューを通して仮説モデルの試案を作成した。その後に、一流指導者 20 名（12 競技）を対象に指導者としての役割を獲得するまでの過程や競技レベル、影響を与えた重要な他者、社会化状況、個人的属性に関して半構造化面接法による個別のインタビュー調査を行い、仮説モデル（試案）の妥当性の確認を試みた。得られたデータはテキスト化し、修正版グラウンデット・セオリー・アプローチを用いて各要因にコーディングおよびカテゴリー化を行い、重要な要素を抽出した。

本研究から一流指導者のキャリア形成過程は早期のスポーツ参加、育成競技者、一流競技者/新米指導者、育成指導者、代表指導者、国際的指導者の 6 ステージで発達過程が構成されること明らかとなった。各発達過程における重要な他者には、メンターコーチや競技の仲間、家族、選手、同僚、エデュケーショナルコーチが示された。社会化状況では、部活動や所属クラブ、海外経験、資格習得の機会、個人的属性においては、リーダーシップ能力やコミュニケーション能力、専門的知識が重要な要素であると示された。今後は仮説モデルの検証が必要である。

キーワード：一流指導者，キャリア形成過程、スポーツの社会化

*　国立スポーツ科学センター　〒115-0056　東京都北区西が丘 3-15-1
**　順天堂大学　〒　270-1695　千葉県印西市平賀学園台 1-1
***　日本オリンピック・アカデミー　〒150-8050　東京都渋谷区神南 1-1-1

Research on the establishment of the hypothesis model of career process in Elite coach

—Focusing on sport socialization factors—

Asahi Yamada*
Yasuhiro Kudo** Haruo Nogawa** Kazuya Kasahara***

Abstract

Recently, coach development and reserve are one of the critical items for international sports success. However, young coach development and elite coach career development are a crucial issue for international success in japan. The purpose of this study was to clear for sport socialization factors in elite coach career process and attempt to establishment of the hypothesis model of career process in elite coach. Detail of the research was to clear how to involvement for sport, how to get a role called elite coach and what kind of sport socialization factors signification for career process to Japanese elite coach. Research method a way was first, the researcher created a rough draft of the hypothesis model by reference the previous studies, made a draft of the hypothesis model by a focus group interview with four stakeholders. After that we tried to make a confirmation of the validity of the hypothesis model (draft) by a sample of 20 elite coaches (12 sports). We conducted on Semi-structured interview witch assessed their career stage, athlete level, significant others, socialization situations and personal attributes. The data was translated to text data. After that, we did coding and categorization by use of the modified grounded theory approach in order to extracted critical items.

The results revealed six chronological career stages in elite coach: early sport participation, development athlete, elite athlete/novice coach, development coach, national coach and international coach. The critical item in significant others of each career are meter coach, peer, family athlete coworker and educational coach. The socialization situations were club activities in school and private, experience of overseas, a chance of acquired the qualification. The personal attributes were leadership ability, Communication skills and profess expert knowledge. In the future, it is also necessary for verify the hypothesis model.

Key Words : Elite coach, Career process , Sport socialization

* Japan institute of sports sciences 3-15-1 Nishigaoka, Kita-ku, Tokyo 115-0056, Japan
** Juntendo University 1-1 Hiraga-gakuendai, Inzai-shi, Chiba 270-1695, Japan
*** Japan Olympic Academy 1-1-1 Jinnan, Shibuya-ku, Tokyo 150-8050, Japan

1．はじめに

近年、トップスポーツの推進に寄与するスポーツ指導者の養成やトップアスリートから指導者へのデュアルキャリア形成に関して国レベルでの環境整備が進められている。De Bosscher（2007）は、国際競技力向上施策（SPLISS）における成功要因のひとつとして指導者の管理と養成を挙げ、主に指導者の質の確保と雇用機会の拡充が重要であると報告している。日本の現状を見てみると、日本代表の指導者の多くは外国人が占めている。また、海外で活躍する日本人指導者はまだまだ少ないのが現状である。日本の若手キャリアの発展を促し、グローバル化することはわが国の国際競技力向上にとって重要な課題であるといえよう。

スポーツ選手を対象としたキャリア形成過程に関する研究は、1980 年代より急激に増え日本でも 1990 年代から研究されるようになった。これらの研究の多くは、アスリートの引退に焦点を当てた研究（Bailie&Danish,1992 ; Drahota & Eitzen,1998 ; Taylor & Ogilvie,1994）であり、スポーツ選手の引退とは人生の変遷課程の一部であると考えられ、心理学説や社会学説の変遷（Transition）モデルが用いられてきた。近年では、人としてのキャリア形成とアスリートとしてのキャリア形成の両方を同時に取り組むデュアルキャリアに関する研究が増えている。指導者に焦点を当てた研究（Bloom et al.,1997 ; Erickson et al.,2007 ; Gould et al.,1990 ; Salmela,1995 ; Schinke et al.,1995）の多くは、カナダやアメリカを中心に行われており、日本ではほぼ皆無に等しい。

Schinke et al.(1995)は、カナダのバスケットボール競技の一流指導者 6 名を対象にスポーツ参与期から国際的な指導者になるまでのステージと各ステージにおける影響要因を明らかにした。それによると、国際的指導者の役割に至るまで 7 つのステージが存在し、3 ステージは競技者として、4 ステージは指導者としてのキャリアステージで構成されていることがわかった。先行研究では、指導者になる以前のキャリアをプレキャリア、指導者になってからのキャリアをキャリアと捉えている。一流指導者になる上でのプレキャリア期である競技者としての競技レベルについては、多くの研究で議論されている。

国際競技力の高い国を対象に調査を続けている De Bosscher（2015）によると、一流指導者の多くは自身も一流選手の経験を有しており、オリンピックや世界選手権などの主要な国際大会において世界トップクラスの経験があると報告している。一方では、エリートレベルでの競技経験を有することは必要条件ではない（Schinke et al.,1995)との意見も多い。Carter&Broom(2009)によると、一流競技者経験の有無によって指導者のキャリアステージの進行は異なると報告していることから、競技者としての競技レベルがその後の指導者としての発達過程において影響を与えると示唆される。日本では、古くから「名選手名監督にあらず」と言われているが、その実態は明らかにされていない。また、一流指導者としての最終的なキャリアステージへの移行はポストの少なさから非常に困難であり、指導者として国際大会での優勝経験の有無やマスメディアへの露出の重要性が指摘されている。このように様々な要因が一流指導者としての役割を獲得する上での影響要因であると推察されるが、日本における指導者のキャリア形成過程研究はほぼ皆無に等しい。

2．目的

本研究の目的は、海外指導者への依存度が高い日本のスポーツ界の現状を鑑み、日本における一流指導者に着目し、指導者としてのキャリア形成過程（プロセス）における社会的要因を明らかにし、一流指導者のキャリア形成過程の仮説モデルを構築することである。具体的には、「スポーツへの社会化」、「スポーツによる社会化」理論（Kenyon & McPherson,1973 ; 山口,1987 ; 二宮,2012）と「Transitional Model」理論（Wylleman&Lavalle,2004）を援用し、青年前期から現在に至るまでのライフサイクルに着目し、「一流指導者的発達」とスポーツの社会的要因（3 要因）である「重要な他者」、「社会化状況」、「個人的属性」を明らかにすることで仮説モデルの構築を試みる。

3．方法

3－1．用語の定義

1）一流指導者（Elite Coach）

一流指導者とは、エリート選手や若いタレント選手を指導しているコーチを一流指導者と定義している（De Bosscher et al,2008)。また、De Bosscher et al.(2015)によると、ナショナルトレーニングセンターや地域のトレーニングセンターにおいてオリンピックや世界選手権、大陸大会に出場しているエリート選手や若いタレント選手を指導しているコーチを一流指導者としている。

本研究では、各競技種目の日本代表チームまたは

プロリーグチーム（1部）における監督、ヘッドコーチ、専任コーチを一流指導者として定義する。

２）キャリア形成過程（Career Process）

Schinke et al.(1995)は、専門競技の開始から一流指導者までの一連の過程を一流指導者のキャリア形成過程としている。Ebaugh（1988）やDrahota & Eitzen（1998）においては、ひとつの職業に就く前からその職業に就き従事している段階を経て、次の職業へと移行する一連の過程をキャリアプロセスとしている。

本研究では、青年前期から現在の役割（一流指導者）を獲得するまで形成過程をキャリア形成過程とする。

３－２．研究の前提

本研究では、一流指導者に関する先行研究から仮説モデル（素案）を作成した。仮説モデル（素案）については、構造的妥当性を検討するため各スポーツ関係の各専門家を対象にフォーカスグループインタビュー（以降FGI）を実施した。FGIで得られたデータを基に一部修正を行い、仮説モデルの試案を作成した。そのあとに、一流指導者を対象に半構造化面接法を用いたインタビュー調査を実施し、キャリア形成過程に関する質的データを収集した（図１）。得られたデータを基に日本における仮説モデル構築を試みた。なお、研究代表者の所属機関において、倫理委員会への研究計画の申請を行い、承認を得て実施した。

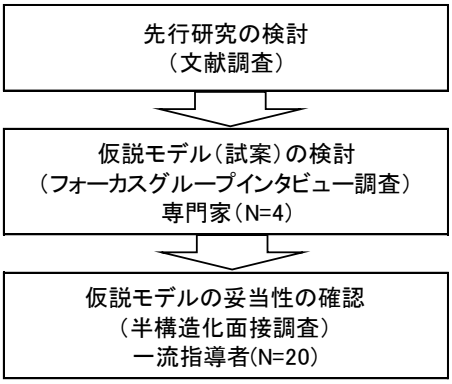

図１．調査のフローチャート

３－３．フォーカスグループインタビュー（FGI）

先行研究から作成した仮説モデル（素案）の妥当性を検討するため、スポーツ社会学(n=1)、キャリアプロセス(n=1)、コーチング(n=1)の専門家とプロリーグ取締役経験者（n=1)を対象にFGI調査を行った。なお、Vaughn et al.（1999）を参考にガイドラインを作成した。調査では、先行研究を参考に作成した仮説モデル（素案）に対する意見収集を主要な目的に、日本の文化的背景を踏まえた一流指導者的発達、重要な他者、社会化状況、個人的属性の各構成要素についてインタビューを行った。FGIの結果、複数の専門家から一定の評価を得られたため、本研究の構造的妥当性は確認された。なお、FGIで作成した仮説モデル（試案）については、スポーツの社会化研究の先駆者である専門家（n=1)からも意見を収集し、仮説モデル（試案）を完成した。

３－４．半構造化面接法によるインタビュー調査

１）調査対象者

本調査では、オリンピック種目における現役の一流指導者及び経験者を対象に調査依頼を行い、調査への同意を得られた12競技、20名に対して調査を実施した（表1)。なお、一流指導者としての経験を有する者も調査対象者に含むこととしたが、その場合は一流指導者の役割を辞してから1年未満または日本代表やプロリーグに所属しているが現在は指導者以外の役割を獲得している者とした。表1には、2017年1月時点の役割を記載している。調査方法は、半構造化面接法を用いたインタビューを個別に行った。

所要時間については被面接者一人あたり60分から90分程度であった。調査期間は、試合シーズンを考慮し、オフシーズン期である2017年1月7日から2月14日で実施した。調査内容については被面接者からの許可を得てICレコーダーにて録音した。

表1．調査対象者

	競技種目	対象者
1	陸上競技	強化委員（1）
2	競泳	輩出コーチ（1）
3	サッカー	プロリーグ1部　監督（1） プロリーグ1部　コーチ（1） プロリーグ1部育成部長＜代表コーチ経験＞（1）
4	体操（器械体操）	強化委員（1） 国際審判委員＜代表コーチ経験＞（1）
5	レスリング	ヘッドコーチ（1） 大学コーチ＜強化部長経験＞（1） 実業団コーチ＜代表コーチ経験＞（1）
6	ソフトボール	トップリーグ監督（1）
7	野球	プロリーグ1部　1軍コーチ（1） プロリーグ1部統括部＜2軍監督経験＞（1）
8	フェンシング	専任コーチ(2)
9	ボート	専任コーチ（1）
10	カヌー（スラローム）	専任コーチ（1）
11	セーリング	専任コーチ(2)
12	スピードスケート	専任コーチ（1）

※経験者の場合は、＜　＞内に経験した指導者キャリアを記載

2）調査項目

本調査では一流指導者のキャリアプロセス研究（Erickson et al.,2007 ; Schinke et al.,1995）の調査ガイドラインを参考に日本人の一流指導者がどのようにスポーツと関わり、一流指導者としての役割を獲得したのか、その過程においてどのような要因が作用しているか、一流指導者に至るまでの発達過程と各発達過程における社会化要因（重要な他者、社会化状況、個人的属性）に関する質問項目を設定した。調査項目の枠組みは、表2の通りである。

本調査を行う前に、一流指導者（n=2）を対象にパイロット調査を実施した。調査では、調査項目や調査時間等の確認を行った。

表2. 調査項目

要因		調査項目
一流指導者的発達		スポーツ参与期から一流指導者までのキャリアステージ（過程）
社会化要因	重要他者	影響を与えた人々（両親、仲間、指導者、家族、選手）
	社会化状況	社会化が行われる機会や環境，制度や生活場面 （部活動、所属チーム、活動に対する支援、海外遠征、資格取得の機会）
	個人的属性	パーソナリティの特性 （スポーツ能力、学力、コーチング能力、リーダーシップ能力、コミュニケーション能力）

3）分析方法

分析は、インタビューデータに基づいた仮説モデルの構築を目指すため、本研究では修正版グラウンデット・セオリー・アプローチ（M-GTA）を用いた。具体的には、収集したデータをテキスト化して、コーディングおよびカテゴリー化を行った。なお、カテゴリーは、一流指導者的発達、重要な他者、社会化状況、個人的属性に分類した。また、ライフサイクルについては、スポーツの社会化研究の専門家からの指摘を受けて「青年前期（13-17歳）、青年後期（18-22歳）、成人前期（23-30歳）、成人後期（31-40歳）、中年期（41-60歳）」に分類した。

4．結果及び考察

4－1．フォーカスグループインタビュー（FGI）

1）一流指導者的発達（キャリアステージ）

日本の発達段階は、Schinke et al.（1996）と同様に①早期のスポーツ参加、②育成競技者、③国際的競技者、④新米指導者、⑤育成指導者、⑥代表指導者、⑦国際的指導者で構成されるであろうと語られた。しかしながら、競技によっては幼児期から専門競技を開始して、青年前期には国際レベルに到達している選手が存在しているため、日本における一流指導者のキャリア形成過程では競技者としての発達段階が前倒しになる可能性があると語られた。指導方法として「技を見せる」、「技を説明する」競技に分類することができ、指導者自らが技を見せて指導する競技においては、高レベルでの選手経験を有する必要があると指摘された。山口（1987）によると指導者のランクは、過去の競技成績に影響されると報告していることから競技成績によって発達過程が異なると推察される。一流指導者の開始時期については、オリンピック競技では30代後半、プロリーグでは40歳以降であると示された。

2）重要な他者

日本人の一流競技者を対象としたスポーツの社会化研究によると学校の部活動がスポーツ参与への重要な社会化エージェントであると考えられている。FGIにおいても選手としての発達段階においては、保健体育の教師だけでなく部活の顧問教員や担任教員が重要な他者になると語られた。また、部活動においては同級生だけでなく先輩や後輩も仲間として捉えることができると示された。新米・育成・代表指導者の発達過程においては指導者を教育する指導者であるエデュケーショナルコーチも重要な他者として考えられると語られた。また、一流指導者になった際には参謀的役割の指導者（同僚）が重要な他者に追加されると指摘された。なお、ヘッドコーチや監督など、チームを統括する役割の場合は、非常に孤独な立場であることからメンタルケア＝相談役の存在が大きいと語られた。

3）社会化状況

競技者の際に海外遠征経験を有することは、一流指導者的発達において必要な要素であると語られた。また、指導者資格については、指導者システムが構築している競技種目においては、競技者としてのキャリア段階から指導者に関する資格を習得している場合が存在すると指摘された。また、情報化社会を迎え、専門競技を行う上で本やテレビなどのマスメディアからの様々な情報を得ていると語られた。

4）個人的属性

個人的属性には「生まれ持った能力＝先天的能力」と「生まれた後に身につく能力＝後天的能力」が存在すると語られ、各発達段階ではポジションの少なさも考えられるため、タイミングやめぐり合わせも存在すると指摘された。一流指導者の場合、専門的知識の習得が重要であると考えられることから一定レベルの学力の必要性が示された。また、選手や同僚、統括競技団体とコミュニケ―ションを取

る機会が多いと考えられるため、コミュニケーション能力の高さも求められると語られた。なお、成功体験だけではなく失敗の経験も重要となると指摘された。

４－２．半構造化面接調査（一流指導者）

１）サンプルの基本的属性

性別は男性が 100%(n=20)であった。年齢は、平均 45.4 歳（±8.0 歳）であり、指導年数は、平均 15.1 年（±6.9 歳）であった。また、婚姻の有無については既婚が 75%であり、未婚が 25%であった。指導競技の選手経験については選手経験有が 100%であった。このことから、指導する上では専門競技での選手経験を有している必要がある。なお、最終学歴については、大学 50%（n=10）、大学院 30%（n=6）、大学中退 10%(n=2)、高校 10%（n=2）であった。

２）一流指導者的発達（キャリアステージ）

専門競技開始年齢は、10.7 歳（±4.6）であり、引退年齢は平均 29.8 歳（±4.3）であった。なお、競技年数は、平均 19.2 年(±5.0)である。Gilbert et al.,（2006）は、一流指導者の共通点として競技年数が平均 13 年と報告しているが、日本では長期傾向であった。指導者を開始した年齢については、平均 30.3 歳（±4.8）であった。Erickson et al.（2007）は指導者になる年齢は24歳から28歳であると述べているが、日本の場合は先行研究と比べて指導者への移行年齢は晩期傾向になることが示唆される。

競技レベルについては、日本代表経験有が 70%（n=14）であり、そのうちオリンピック出場経験有が 45%（n=9）であった。なお、オリンピックでのメダル獲得者は１名に留まった。各ライフサイクルにおける競技レベルは、青年前期での代表経験有が 25%（n=5）、青年後期は 60%（n=12）、成人前期は 65%（n=13）の結果となった。De Bosscher（2015）は、一流指導者の多くは競技者として世界トップクラスの競技レベルを有していると述べているが、日本においては必ずしも必要ではないと示唆された。なお、代表経験者は引退後にジュニアまたは U23 等の代表選手を指導する指導者へ移行することが確認された。

すべての一流指導者は、競技を引退した後に指導者としての一歩を歩んだわけではなく育成競技者期や一流競技者期から後輩やチームメイトへの指導を経験する機会が多く、成人前期において指導方法の確立が見られた。このことから、先行研究（Erickson et al.,2007）と同様に競技者時代に指導者への第一歩を進むことが明らかとなった。指導者を志した年齢は、引退以前にあり平均 5.85 年（±4.2）前であった。なお、引退理由として出場機会の減少や年齢的限界が挙げられた。なお、競技者から指導者への移行は同年または翌年が 75%(n=15)ともっとも多く、選手兼コーチ経験ありも３名存在した。本調査から早期のスポーツ参加から一流指導者へ至る一流指導者的発達は①早期のスポーツ参加、②育成競技者、③一流競技者/新米指導者、④育成指導者、⑤代表指導者、⑥国際的指導者の６ステージから構成されることが示唆される。

３）重要な他者

青年前期・青年後期には、専門競技に没頭しており多くの時間を仲間や顧問の教員、指導者と過ごしたとの意見があったことから早期のスポーツ参加期と育成競技者期においては、これらが重要な他者であると示唆される。また、両親からの支援を受けていたことから両親も重要な他者であることが推察される。これらはスポーツ参与期には両親、仲間、指導者が社会化において重要な他者であると報告した Kenyon & McPherson（1973）を支持する結果であった。さらに、マスメディアなどを通じて海外選手への憧れも存在したことがわかった。一流競技者では、代表選手を経験することに従い、指導者や仲間に加えて統括競技団体の強化部長等の存在も挙げられた。また、競技者を引退する際に統括者から指導者への移行を勧められたと述べており、重要な他者として示唆される。Ericson et al..（2007）は、各発達過程においてメンターコーチといわれるロールモデル的役割の指導者の存在が重要であると指摘しているが、本調査でも育成競技者期や一流競技者期にメンターコーチの存在が明らかとなった。また、育成指導者期や代表指導者期には、海外から招聘された外国人指導者とともに働いた経験有が 50%（n=10）であり、これらの外国人指導者から新たな知識を得たとの意見があった。FGI 調査結果と同様に育成指導者や代表指導者時にエデュケーションナルコーチとの出会いが重要な要素であると考えられる。

一流指導者の多くは、単年契約であることから不安定な雇用である。また、１年のほとんどを練習や合宿、試合に費やしていることから仕事を継続する上では、家族の理解が必要となると回答しており、家族も重要な他者である。また、指導者を続ける上でのやりがいについては、指導している選手が上達すること、主要な国際大会でメダルを獲得することなどを挙げており、Dowson&Gastin（2016）と同様に選手も重要な要素であることが推察される。なお、指導者としての仕事を行う上で同僚との関係も

重要な要素であるとの意見が多く聞かれた。そのため、指導者としての役割において同僚も重要な他者であると考えられる。

4）社会化状況

専門競技を開始した場所については、部活動が70%(n=14)ともっとも多く、続いて民間クラブが25%（n=5）であった。このことから先行研究と同様に学校は、社会化が行われる場所として重要な要素であることが示唆された。なお、中学や高校、大学の部活動においてキャプテン経験を有している者が多かった。また、青年前期・後期において海外遠征や海外チーム所属、留学などを理由に海外経験を有している者が75%を占めており、海外経験も重要な要素であることが推察される。

資格取得については、資格取得者が90%であり、多くは日本体育協会や日本オリンピック委員会が認定している資格を有していることが明らかとなった。しかしながら、代表選手を指導する上で取得することは義務づけられてはいないとの意見があがった。一流指導者らは、研修会などを通じて他競技指導者との交流が図られた点は良かったとの回答が得られ、他種目の指導者に相談することもあるとした。Dowson&Gastin（2016）; Gould et al（1990）は、一流指導者は自身のキャリア開発に必要な学習の機会へ参加することに意欲的であると報告しているが、日本でも同様な傾向を示している。しかしながら「参加したくても時間がない」との意見も聞かれ、意欲はあるが実際はあまり参加できないこと指導者の存在も明らかとなった。一方で、新たな情報はインターネットやテレビ、本などのマスメディアを通して積極的に取り入れているとの意見もあり、マスメディアも重要な要素のひとつであることが推察される。

5）個人的属性

早期のスポーツ参加期では、他種目競技の経験ありが80%（n=16）であり、重要な要素といえる（Erickson et al.,2007）。すべての一流指導者らは指導する上で参考にしていることに「自らの選手経験」と回答していることからBecker（2009）の指摘と同様に専門競技経験も要素として示唆される。一流指導者らはリーダーシップ能力やコミュニケーション能力の必要性に関する意見があったことからこれも重要な要素であることが考えられる。獲得時期については、一流指導者らの多くは早期のスポーツ参加期や育成競技者期にキャプテン経験を有していることからこれらの時期からスポーツ集団の中でリーダーシップを発揮していたと推察される。

一流指導者はスポーツ科学への関心が高い傾向にあり、スポーツ心理やスポーツ心理、教育学に関する知識が必要（Gould et al.,1990）であり、多くは体育学部やスポーツ専攻やスポーツに関係する専門学校を卒業している（Schinke et al.,1995）と考えられているが、本調査では体育学部へ進学した一流指導者は、35%(n=7)に留まった。しかしながら、指導者を志した年齢が青年前期であるとスポーツを専門とする学校へ進学し、専門的知識を取得していたことがわかった。また、国際クラスでの競技経験を有している場合は、生理学やトレーニング、栄養などの各専門家から支援を受けており、各専門家から専門的知識を得ていたと回答した。これらのことから、体育学部等への進学は必要不可欠であるとは言い難いが、競技者としての発達過程で専門的知識を取得することが示唆される。

5．まとめ

本研究では、フォーカスグループインタビュー（FGI）調査および半構造化面接調査を用い、得られたデータから一流指導者のキャリア形成過程（プロセス）における社会的要因を明らかにし、一流指導者のキャリア形成過程の仮説モデルを構築した（図2）。一流指導者的発達は、①早期のスポーツ参加（－15歳）、②育成競技者（12－17歳）、③一流競技者/新米指導者（17－34歳）、④育成指導者（26－35歳）、⑤代表指導者（32歳－）、⑥国際的指導者（38歳－）の6ステージで発達過程が構成されることが確認された。また、各発達過程における社会化の3要因（重要な他者、社会化状況、個人的属性）が明らかとなった（図2）。仮説モデル（試案）と異なる点については、FGI調査では重要な他者に「担任教員」や監督・ヘッドコーチの場合は「メンタルケア＝相談役」の存在が挙げられていたがインタビュー調査からはこれらの要素は抽出されなかった。なお、社会化状況の「キャプテン経験」はインタビュー調査から新たに抽出された要素である。

競技レベルは、育成競技者期では全国レベル、一流競技者期では国際レベルを有することが多いと示された。しかしながら、競技者として国際レベルが必要不可欠な要素ではない。国際レベルを有していない場合は、青年後期において専門的知識を習得することが必要となる。日本においては、学校の部活動が重要な社会化エージェントである（山口,1987）と考えられているが、本研究調査から部活動で出会う指導者＝顧問教員の重要性が示された。このことから一流指導者を養成する上では、中

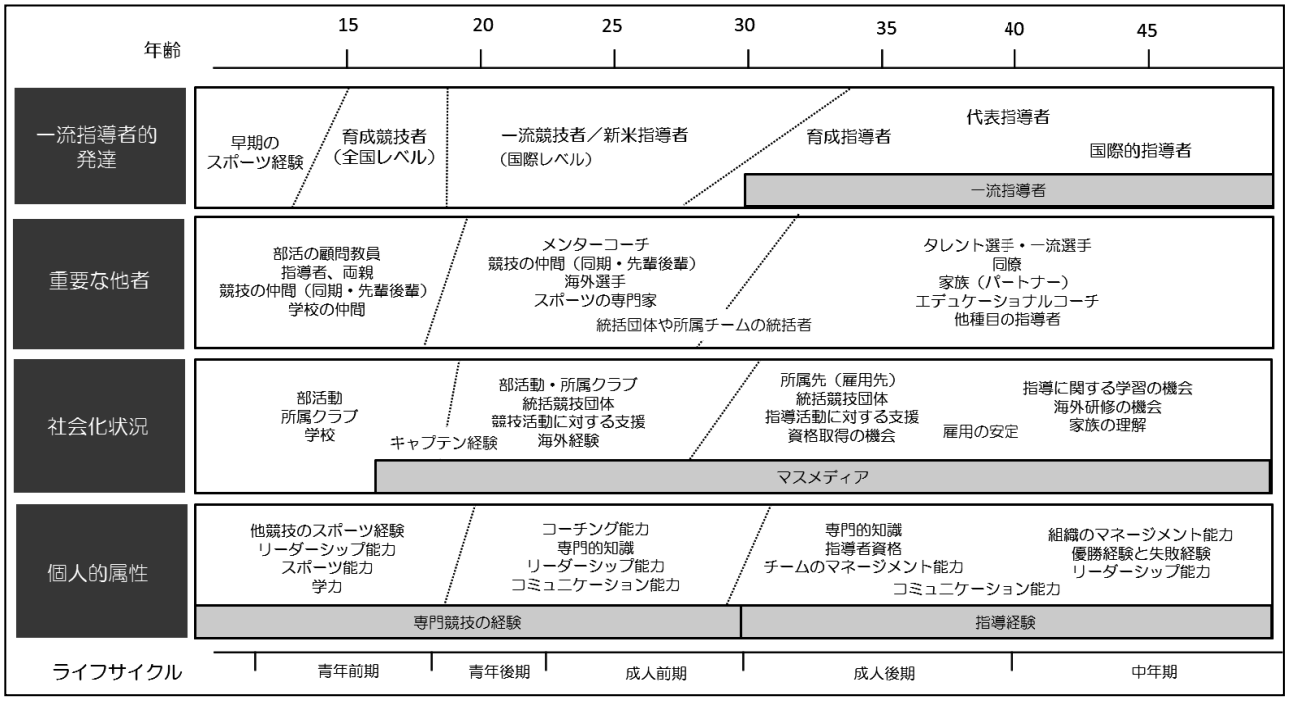

図 2. 一流指導者におけるキャリア形成過程の仮説モデル

学や高校の顧問教員の指導の質向上も課題のひとつであるといえよう。また、エデュケーショナルコーチの重要性も示されたことから指導者の指導者を養成することと研修の機会や受講時間の確保が必要であると考える。

本研究では、調査対象者が男性のみとなった。一流指導者における女性の割合は非常に少ないが日本における一流指導者におけるキャリア形成過程の概念モデルを構築する上では、女性も対象に調査を行う必要がある。また、本研究では仮説モデルを構築することを目的としていたため、今回明らかとなった要素についてはどの程度、キャリア形成過程へ影響するかは明らかにされていない。今後は、本研究で構築した仮説モデルの検証を行う必要がある。

参考文献

Baillie, P. H., & Danish, S. J. (1992). Understanding the career transition of athletes. The Sport Psychologist, 6(1), 77-98

Bloom, G. A., Schinke, R. J., & Salmela, J. H. (1997). The development of communication skills by elite basketball coaches. Coaching and Sport Science Journal, 2(3), 3-10.

Carter, A. D., & Bloom, G. A. (2009). Coaching knowledge and success Going beyond athletic experiences. Journal of Sport Behavior, 32(4), 419-437

De Bosscher, V. (2007). Sports policy factors leading to international sporting success. ASP.

De Bosscher, V., Shibil, S., Westerbeek, H., & Van Bottenburg, M. (2015). Successful elite sport policies: An international comparison of the Sportspolicy Factors Leading to International Sporting Success (SPLISS 2.0) in 15 nations. Meyer & Meyer Verlag.

Dawson, A., Dioth, T., & Gastin, P. B. (2016). Career facilitators and obstacles of Australian football development coaches. International journal of Sports Science & Coaching, 11(2), 255-269.

Drahota, J. A. T., & Eitzen, D. S. (1998). The role exit of professional athletes. Sociology of Sport Journal, 15(3), 263-278.

Ebaugh, H. R. F. (1988). Becoming an ex: The process of role exit. University of Chicago Press.

Erickson, K., Côté, J., & Fraser-Thomas, J. (2007). Sport experiences, milestones, and educational activities associated with high-performance coaches' development. The sport psychologist, 21(3), 302-316.

Gilbert, W., Côté, J., & Mallett, C. (2006). Developmental paths and activities of successful sport coaches. International Journal of Sports Science & Coaching, 1(1), 69-76.

Gould, D., Giannini, J., Krane, V., & Hodge, K. (1990). Educational needs of elite US national team, Pan American, and Olympic coaches. Journal of Teaching in Physical Education, 9(4), 332-344.

Kenyon, G. S., & McPherson, B. D. (1973). Becoming involved in physical activity and sport: A process of socialization. Physical activity: Human growth and development, 303-332.

二宮浩彰(2012). スポーツへの社会化と専門化.原田宗彦（編著）スポーツ産業論.杏林書院, pp95-107.

Salmela, J. H. (1995). Learning from the development of expert coaches. Coaching and Sport Science Journal, 2(2), 3-13

Schinke, R. J., Bloom, G. A., & Salmela, J. H. (1995). The career stages of elite Canadian basketball coaches. Avante, 1(1), 48-62.

Super, D. E. (1980). A life-span, life-space approach to career development. Journal of vocational behavior, 16(3), 282-298.

Taylor, J., & Ogilvie, B. C. (1994). A conceptual model of adaptation to retirement among athletes. Journal of applied sport psychology, 6(1), 1-20

Vaughn, S., Schumm, J. S., Sinagub, J. M., 井下理, 田部井潤, & 柴原宜幸. (1999). グループ・インタビューの技法. 東京: 慶應義塾大学出版株式会社, 63-70.

Wylleman, P., Alfermann, D., & Lavallee, D. (2004). Career transitions in sport: European perspectives. Psychology of sport and exercise, 5(1), 7-20.

山口泰雄, & 池田勝. (1987). スポーツ社会学の最近の研究動向-1-スポ-ツの社会化. 体育の科学, 37(2), p142-148.

この研究は笹川スポーツ研究助成を受けて実施したものです。

笹川スポーツ財団
SASAKAWA SPORTS FOUNDATION